

## 保健体育科が育成を目指す資質・能力と ATL スキルとの関連

### Relationship between the qualities and abilities pursued by the Physical and Health Education Division and ATL skills

保健体育科

◎深澤祐美子 橋本みゆき 佐藤 毅

谷口善一 川原拓也 板村邦弘

#### 要旨

本年度は、ATL スキルの中でも、メディアリテラシーに着目し、ダンスの授業実践を行った。コミュニケーションスキルや協働スキルは体育の中でも着目しやすい分野であったが、一方で本校の保健体育において、まだメディアリテラシーに着目した実践というのが包括しきれていないスキルの一つであったからだ。ただ映像を撮影するというだけでなく、それを活用して様々な見せ方を考えるという点においては一定の成果が見られた。

今後は、保健体育科がとらえる資質・能力と ATL スキルとの整合性を検討するだけでなく、保健体育科のみならず、他教科との連携もしながら ATL スキルの向上を図り、なおかつその伸長をどのように生徒にフィードバックさせていくのかということを検討していく必要がある。

#### I. はじめに

本校は、IB 教育を開始して 12 年目を迎える。IB（国際バカロレアプログラム）の中期段階としての本校 MYP 保健体育の目標<sup>1</sup>は、本校保護者へも示している。その内容は以下の通りである。

体育：国際社会の一員として心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、積極的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上のための基礎・応用を学び、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

保健：個人生活における健康・安全に関する理解を通して、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる。

さらに個々の指導者が心がけていることは、生徒が運動することの価値を正しく理解し、評価するとともに健康な生活を主体的に選択する意識を高めることにある。本校の保健体育科においても、この目標から、単元等に生かせるねらいを念頭に置きながら、10 の学習者像（IB Learner Profile）やグローバルな文脈（Global contexts）、保健体育が担う重要概念（Key concepts）や関連概念（Related concepts）を意識しながら、生徒を観察して、どのような内容を提示すべきか検討している。また、同様に運動・健康についての学習（learning about）と運動・健康を通じた学習（learning through）の両面から日常の授業実践を行っている。

一昨年度の研究<sup>2</sup>では、保健体育科の目標から導かれる資質・能力を 4 つに定義した。

- ① 生徒は他者のアイデアを正しく評価し、尊重すること
- ② 効果的な連携やコミュニケーションのスキルを高めること

③ 生徒が社会性のある責任感を養うために役立つこと

④ 肯定的な人間関係を築くための多くの場面を提供すること

これらの資質・能力を伸ばさせるために実践を行ってきたが、保健体育科において培った資質・能力が教科横断的に、あるいは生涯にわたって活用されていく ATL (Approaches to learning) スキルとして生徒に身に付いているかについては整理しきれていない。評価規準 (ルーブリック) を示し、生徒はその評価を見ながら自らの改善点を整理していくことは今までも行ってきたが、教師側が提示する評価だけでなく、様々なスキルを自ら確認するための ATL スキルについては、本校においていまだ教科における ATL スキル育成のための学習場面や支援は整理しきれていないという現状であった。

これらのことから、昨年度の研究では、保健体育科のめざす資質・能力が、生徒の学習の方法である ATL スキルとどのように関連しているか、その育成のための支援はどのようなものかを検討していくことを目的とし、まずはコミュニケーションスキルと協働スキルに着目した。

## II. 保健体育科が育成を目指す資質・能力と ATL スキルとの関連

### II-1 昨年度までの経緯

保健体育科では、MYP 保健体育のガイドにある 4 つの評価規準 (保健分野は規準 B と C を除く 2 つ) に沿って授業を実施している。しかし、実際の学習活動においては、それぞれの評価規準の内容に基づいて明確に分離することは難しい。

そこで、保健体育科における学習活動を図 1 のように 6 つに大別することとした。

- 実践：体育分野における運動場面
- 検討：自身やグループの行動を方向づけるための正しい情報や経験に基づいた選択
- 行動選択：知識・理解等に基づく具体的実践を行う上での決断や判断
- 合意形成：集団種目及びグループ活動における意思の共有や決定
- 省察・記録：学習活動を振り返り、内容を整理することを通じた意識の顕在化
- 意思決定：学習内容に基づく自己の生き方に関わる方向づけ

キーワード	ATL				学年・科目	学習内容・活動
実践	コミュ	協働	整理		全学年 体育	運動実践に基づく経験 (自己の体験や仲間の動き) を通して効果的・効率的な動きを構造化して理解したり、再現したりして運動技能を高めていく。
	情動	振返	情報			
	対人	批判	創造	転移		
検討	コミュ	協働	整理		全学年 体育	個人や集団の運動実践における目的を達成するため、個人及び集団技能の向上に必要な情報を収集したり取捨選択したりする。 個々人がもつ経験や社会の中に数多く存在する情報の中から、健康的な生活を送るための意思決定・行動選択を行う上での判断材料となり得る情報を取捨選択する。
	情動	振返	情報			
	対人	批判	創造	転移		
	コミュ	協働	整理		全学年 保健	個々人がもつ経験や社会の中に数多く存在する情報の中から、健康的な生活を送るための意思決定・行動選択を行う上での判断材料となり得る情報を取捨選択する。
	情動	振返	情報			
	対人	批判	創造	転移		

行動選択	コミュ	協働	整理	全学年 保健	保健分野及び保健科において学習した内容（知識）とその理解に基づき、現在及び将来の生活において直面する健康・安全の課題に対する自己の行動を思考したり判断したりする。
	情動	振返	情報		
	対峙	批判	創造		
合意形成	コミュ	協働	整理	全学年 全科目 (個人運動 種目を除く)	集団活動において同一の課題・目標を達成するために、個人がもつ経験や情報を統合したり取捨選択したりしながら、互いが納得できる結論を導き出す。
	情動	振返	情報		
	対峙	批判	創造		
省察・ 記録	コミュ	協働	整理	全学年 全科目	学習活動を振り返り、その活動で得た知識、技能、思考力・判断力・表現力を整理するとともに、自己の取り組み方を評価したりこれからの取り組み方についての見通しを記述したりする。
	情動	振返	情報		
	対峙	批判	創造		
意思決定	コミュ	協働	整理	全学年 全科目	学習活動において得た知識や経験をもとに、今後の学習活動や日常生活において、見通しを立てて取り組んでいこうとする意欲や態度を高める。
	情動	振返	情報		
	対峙	批判	創造		

図1 保健体育科における学習活動

昨年度は、この保健体育科における学習活動を6つに大別した（キーワード）の学習活動とATLスキルの関連を検討し、学習内容・活動で分類することとした。

また、後期課程における学習指導要領と本校のMYPの関係については、新学習指導要領を

評価規準		規準 A	規準 B	規準 C	規準 D
		知識と理解	活動の計画	応用と実践	活動の振り返りと改善
コミュニケーション	コミュニケーションスキル	合意形成		実践	省察・ 記録
社会性	協働スキル				
自己管理	整理整頓する力				
	情動スキル			実践	
	振り返りスキル	行動選択		意思決定	
リサーチ	情報リテラシースキル	行動選択／検討			
	メディアリテラシースキル				
思考	批判的思考スキル	検討		実践	
	創造的思考スキル				
	転移スキル	行動選択／検討			

※資質・能力の3つの柱の色分け

知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
-------	-------------	-------------

図2 保健体育科学習場面におけるATLスキルと評価規準の関連

見据えて現行の評価である4観点ではなく新たな3観点でとらえることとし、知識・技能にかかわる活動を「実践」、思考力・判断力・表現力にかかわる活動を「検討」「行動選択」「合意形成」、学びに向かう力・人間性を「省察・記録」「意思決定」と置くこととした。図2は、保健体育科における具体的な学習場面をATLスキルと評価規準から整理したものである。

重複となるが、これらの学習場面は複雑に関連しているため、必ずしも明確に分類できるわけではない。しかし、ATLスキルに注目し、その育成のための支援の中心を想定すると、上記のようになると考えた。

ATLスキルは大きく5項目に分類されており、その下にさらに細かく提示されている。これらと、一昨年度定義した保健体育科における資質・能力とを比較したとき、次のようなつながりがあると捉えることができた。

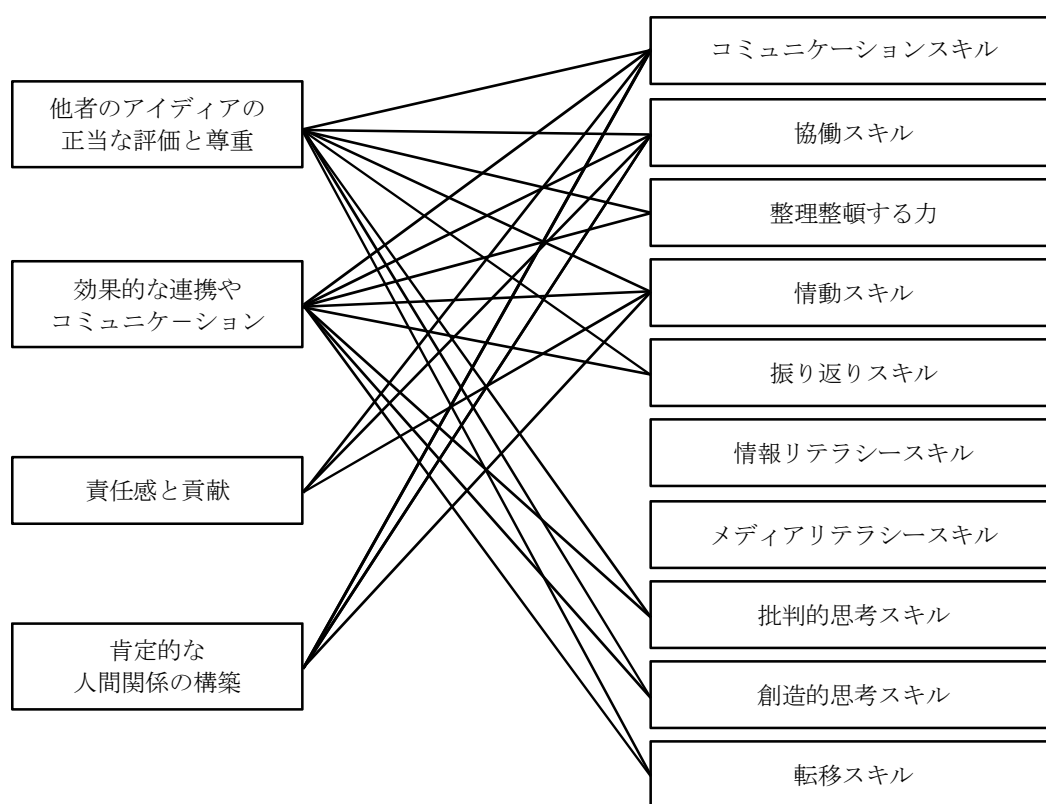


図3 保健体育科における資質・能力とATLスキルとの関連

これらは、体育分野と保健分野に分かれる活動と、共通する活動とがある。また、それぞれの活動は単独で成立するものではなく、全ての資質・能力は関連しているものだとも考えている。しかし、本研究においては、ATLスキルとの関連をより明確にし、その支援を明らかにしていくために、中心となるであろう学習活動で分類することとした。

そして、これらをもとに本研究の主題である保健体育科のめざす資質・能力とATLスキルとの関連を明確化して、それらを育成していく支援を明らかにしていくこととした。

## II-2 今年度の課題

図3からみると、ATLスキルの中でも、情報リテラシースキルとメディアリテラシースキルの部分（リサーチスキル）が昨年度までの取り組みの中では、教科的に明確に関連させること

が出来なかった部分である。

図3からも明らかな通り、保健体育科の目指す資質・能力とATLスキルは、関連の見えにくいところもあるが、多くは関連しているといえよう。また、前述の「行動選択」や「検討」といった学習場面において、これらのATLスキルの育成を図っている。

そこで、今年度は図3を受け、ATLスキル育成のための支援をより明確にしていくため、保健体育科の資質・能力すべてと関連していると考えられる「メディアリテラシースキル」に焦点化し、ダンスの授業における支援を明確化していくこととした。

### Ⅲ. メディアリテラシースキル育成のための支援

ATLスキルの中で、「情報リテラシースキル」と「メディアリテラシースキル」に関して、保健体育科(特に体育分野において)では明確に関連させることができていることを述べたが、今回「メディアリテラシースキル」だけに注目しているのは、次のような理由からである。まず、「情報リテラシースキル」はどのような場面で伸ばさせることができるのかというのをIBの中では15のポイントを挙げている。この中では、主に、情報を収集・分析したり、知的所有権について理解したりすることが挙げられている。実際には情報リテラシースキルとメディアリテラシースキルを明確に分けること自体は難しいが、情報リテラシースキルについては他分野の中で今後取り扱うこととし、ダンスの授業においては「考えや情報を用い、創造するためにメディアと付き合う」ということを目的として挙げている「メディアリテラシースキル」に絞ることとした。

しかしながら、メディアリテラシースキルを伸ばさせることだけを目的として授業をすること自体は、ダンス本来の楽しさや目的といったものを損なう恐れもある。そこで、今回は、メディアリテラシースキルを伸ばさせるために、IBで挙げている、評価規準C:応用と実践の「観点iii:効果的にパフォーマンスを行うための情報を分析し、応用している」といった部分で評価として組み込むことで、スキルの伸ばを目的の一部とすることで、自然な形で伸ばさせることができるのではないかと考えた。

## Ⅳ. 今年度の公開研究会の成果と課題

### Ⅳ-1 授業実践を通して

今回の授業実践では、保健体育科の目的とATLスキルの伸ば、また、本校3年生はダンスを踊ることやダンス授業を行うのも初めてという生徒が9割であることを鑑み、単元計画を立てた。特に、メディアリテラシースキルの育成も目的とする学習内容にするため、簡単なことから取り組ませ徐々に難易度を上げ、3段階の学習形態とし、以下のように段階ごとに課題を設定した。

- 1段階目：少人数で簡単な動きを作り、それをクラス全員でできるよう動きの説明と模範・指導をする。発表者以外は見方を工夫し動きを覚える。
- 2段階目：中人数で課題曲を使用したダンス作りをし、ステージ発表するとともに観客として観る。
- 3段階目：作ったダンスをミュージックビデオ作品として撮影・編集し、発表および観賞する。

単元の学習としては、作る体験と発表の体験・観る体験が難易度を上げながら繰り返される

ことで、ダンスのとらえ方が変わったり広がったり、また、多くの者がリーダーを経験することになり、徐々にクラスの雰囲気がよくなるなどの効果がみられた。

メディアリテラシースキルについて着目すると、「さまざまなメディアや形式を用いて、多数の受け手と情報や考えを効果的にやりとりする」というスキルが特に伸長できたと思われる。その理由は、生徒の活動の様子でも感じ取ることができたが、毎時間記録する学習ノートや単元最後に記録した振り返りに、IBのLearner Profile (IB学習者像)の中で一番成長したと思うものは「コミュニケーションができる人」と記す者が多数おり、情報や考えを効果的にやりとりしていたことがうかがえるからである。

また、アンケートにおける生徒の意識調査では、「ミュージックビデオを作りたい」は、単元のはじめ60%であったが、終わりの調査では90%と、多くの者がミュージックビデオ作品作りに興味関心を持ったことがうかがえる。「ダンスを踊るのに抵抗感がある」は、はじめ40%であったが、終わりの調査では10%と変化しており、ダンスを踊ることに抵抗がなくなったことがうかがえる。この2点は、踊って映像を確認し、動きや位置の調整をする過程を繰り返す学習にて、「映像機器を用いて、仲間と情報や考えを効果的にやりとりする」ことができたから変化していったととらえられる。

これらのことから、「考えや情報を用い、創造するためにメディアと付き合う」という、メディアリテラシースキルを伸長させることができたのではないかと思われる。

しかし、これだけではメディアリテラシースキルを伸長させることができたとは言いがたい。

生徒の学習ノートから、ダンス作品や映像作品作りの過程で、「多角的で多様なソースからもの見方を求める」ような記録自体は少なかったからである。学習ノートへ記述はなくても、活動中に、「ステージでの発表と映像作品用に撮影するものの違い」について述べたり、映像用に位置や動きの細かい修正を提案したりする者はいた。ただ、それはおもに映像を編集する担当の生徒や、もともと映像に興味がある者が多かった。反して、ダンスを踊ることが好きで舞台発表に慣れている生徒は、正面から全体を撮影して残す経験が多かったようで、映像作品を作る過程で発見できることに対する発言は限定的であることが多かった。しかし、活動を進めていくと徐々に役割に関係なく映像とダンスに関する発言が出るようになっていった。これらのことから、ダンスを作って発表することを映像作品作りと組み合わせ、改めてダンスを作り踊ると、ダンス経験の有無に関係なく、ダンスのとらえ方・見方・魅せ方が広がると感じる。もう少し、単元学習時間を効果的に活用させることができたなら、一連の学習を通し、編集のための撮影工夫提案や、映像を編集する前提でダンスの見せ方を提案する者が増え、さらにメディアリテラシースキルの伸長ができたと言えるものになったのではないか。今後は、ミュージックビデオ作品を作るための活動時間を効果的に設定し、「映像によってダンスを『魅せる』とはどのようなことか」という問いを示して考えさせることで、「メディアの表現や発表形態がもたらす影響を理解する」というメディアリテラシースキルを伸長させていきたい。

#### IV-2 ATLスキルに着目するメリット・デメリットとは

これまでの体育科教育の中では、それぞれの種目というコンテンツをもとに多くの研究がなされてきた。昨年度からの我々の研究では、種目というコンテンツではなく、伸長させたい能力 (IBでいえばATLスキルとなる) というコンテンツで授業研究を行ってきた。これは新学習指導要領で挙げられているカリキュラムマネジメントと深いかわりがあるのではないかと、ということが、実践を進めていく中で感じる事が明確にできるようになったのは、成果である

と考えた。

保健体育という教科においては、様々な活動場面でこれらのATLスキルを伸ばさせようという「学びの地図」が学校全体で共有されることによって、教科や種目という枠組みだけでなく、その生徒一人一人が本当に伸ばすべき力を伸ばせているのかということのを省察することが可能になった。

しかしながら、その能力を評価することにおいて、難しい部分があることもわかった。例えば、批判的能力を伸ばさせることを目的に授業を行ったが、本当にその能力を伸ばさせることができたのか、フィードバックもしくは評価していくにあたって、どうしても主観的な部分が多くなるといった点である。また、体育の授業において、一つのスキルだけを伸ばすためだけに授業をしているわけではないため、そのみとりが難しいといった点もある。

#### IV-3 ATLスキルを評価するということ

IBの評価は、種目ができたかできなかったかといった単純なものではない。とすれば、ATLスキルの伸長自体を客観的に評価することの意味について考えるべきである。「主体的・対話的で深い学び」において、ATLスキルのようなコンテンツベースでの授業というのは非常に重要であることは理解できる。そこで本当に重要なことは、その能力の評価が主観的にされているか、客観的にされているかということではなく、生徒一人一人がその能力の伸長を実感できているかことであるとする。主観的・客観的のどちらにしても、他者からの評価が自分自身との評価（実感）と違うのか、違わないのかといったメタ認知的な能力も図ることも同時にできる。

こういったことを考えれば、ATLスキルの伸長を教師が評価すること自体は、ルーブリックを作成して厳密に行うという必要はないのではないかと。それよりも我々が見取るポイントをリストアップしていくことや、それを伸ばすための手立てを考えることのほうが重要なのではないかと考えた。

## V. 来年度の課題

今回のメディアリテラシースキルにおいては、「考えや情報を用い、創造するためにメディアと付き合う」ということが目的としてすでにあげられている。ではそれを伸ばすためにどういった手立てが必要かを考えることのほうが重要であったということになる。

しかしながら数多くあるATLスキルのすべてにおいて、すぐさまにすべての手立てを考えるというのは無理な話でもある。来年度以降の課題としては、今回の公開研究会で挙げられた学びの地図に従って、体育だけで考えるのではなく、他教科との関連性も踏まえながら、より体育科の特色を出しながら伸ばさせる能力とは何なのか、今一度検討し、ATLスキルの伸長といったコンテンツベースの授業を発信していくことだと考えている。

### 注

- 1 拙稿 東京学芸大学附属国際中等教育学校保健体育科「MYPにおける保健体育科の取り組み」東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要 第5号 pp.67-68
- 2 拙稿 東京学芸大学附属国際中等教育学校保健体育科「保健体育科の目指す資質・能力」東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要 第10号 pp.77-96

## Relationship between the qualities and abilities pursued by the Physical and Health Education Division and ATL skills

### Abstract

In this school year, the Physical Education Department focused on media literacy among ATL skills in dance lessons. Communicative and collaborative skills are relatively easy to focus on in P.E., although our department had not sufficiently emphasized this focusing approach to media literacy in our educational practices. In addition to recording video images, we used data and reviewed various ways of showing them, which resulted in a certain level of achievements.

Moving forward, it will be necessary not only to discuss the correlation between the qualities and abilities envisioned in P.E. and ATL skills but also to collaborate with other departments and cultivate students' skills, and give feedback to the students regarding their progress.